

平成 27-28 年度 日本看護科学学会研究・学術情報委員会

看護・保健分野の政策提言のための
研究課題の優先順位の特定
および研究推進の Strategic Plan の設定

事業報告書

事業の背景

超高齢、人口減少という未曾有の社会情勢において、保健医療福祉とそれに関連する教育・研究をめぐる政策の動向は目まぐるしく変化している。特に、生産年齢人口の減少にともなう社会保障財源の制約は、人々の健康と QOL の促進するケアについても、社会経済的観点から効果性のみならず、持続可能性のある方策であることが不可欠となっている。また、世界に共通する健康課題を解決するための国際的な連携（Sustainable Development Goals や認知症サミットなど）が進展してきた。さらに、健康と地球環境や平和・人権との関連の重要性の認識も深まり、グローバルな健康課題に貢献する研究活動が求められている。

このような状況をふまえると、公益社団法人日本看護科学学会（以下、JANS）は看護系学会の公益社団法人として、持続可能性およびグローバルな観点から時宜を得た看護・保健分野の政策提言に資する研究を推進すること、またこのための研究体制づくりをすすめる時期にあるといえる。これらに取り組むにあたっては、次の二点を明確にする必要がある。

ひとつは、今後、JANS が優先的に取り組むべき「看護・保健分野の政策課題」を明確にすることである。日本の社会保障の持続可能性の観点、および世界の健康課題に関する潮流を背景としたグローバルな観点から、人々の健康と QOL に貢献する政策を動かしていくにはどのような研究課題があり、どれを優先するべきか、すなわち、人・資金といった資源をどこに注入していくべきかについてのコンセンサスが必要である。

二つ目は、JANS の将来構想もふまえ看護研究体制構築の Strategic Plan を設定することである。力のある政策提言に貢献する研究を行うためには、大規模研究、国際研究などの政策にインパクトを与える研究方法論と、データを収集するプラットフォーム(患者登録、研究結果のデータベース等)、研究者間の協力を促進する仕組み、コアアウトカムセットなどのグローバルな共同研究ができる研究体制が不可欠である。

そこで、研究・学術情報委員会では、持続可能性の観点、グローバルな観点から、人々の健康と QOL に貢献する政策を動かしていくための研究を推進するために、①優先的に取り組むべき「看護・保健分野の政策課題」を明確にすること、②影響力の強い研究およびそれを可能にする研究体制づくりの方向性を明らかにすることを目的に調査を行い、今後の研究推進の Strategic Plan を検討する。これにより、看護・保健分野の政策提言に資する研究を推進する研究体制を JANS として支援することが可能となる。

事業内容

本事業では、

調査 1 看護およびその周辺領域の研究者を対象としたフォーカスグループインタビューによるエキスパートオピニオンの整理

調査 2 JANS 評議員および委員会委員を対象としたデルファイ法によるコンセンサス形成の 2 調査を実施した。

調査1：看護およびその周辺領域の研究者を対象としたフォーカスグループインタビューによるエキスパートオピニオンの整理

目的

本調査は、優先的に取り組むべき「看護・保健分野の政策課題」を明確にすることを目的に実施した。

方法

対象 以下の選択基準のいずれかを満たす者を対象とした：(1) JANS の学会活動実績をもつ代議員，委員会委員のうち，政策に資する研究や活動に従事している者；(2) JANS の会員を問わず，保健医療分野において政策研究，大規模調査，国際共同研究等に従事してきた看護研究者，およびこれ以外の研究者。

調査方法 調査の目的，方法，対象者に求められる協力内容，および倫理的配慮について明記した文書を用いて，委員会委員が対象者に直接調査協力を依頼し，書面にて同意を得た。2～3名の対象者を1グループとして，委員会委員1～2名がインタビューを実施した。1回のインタビュー時間は60～90分とした。インタビューでは，「持続可能性」および「グローバル」な観点を重視し，1) 重点的に取り組むべき看護・保健分野の問題・課題とその理由，2) 政策へのインパクトの強い研究タイプ・方法とその理由，3) これらの研究を可能にする研究体制とその理由についてたずねた。インタビューは2016年10月～11月にかけて実施した。本調査は，千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した。

分析 逐語録を作成し，意味内容により発言を断片化した。類似した内容を統合しコード化したのち，それぞれのコード案の調査目的への合致の程度を検討し，コードを取捨選択，統合した。コードの内容から，A：優先的に取り組むべき看護・保健分野の研究に関する課題，B：優先的に整備すべき研究体制，の2領域に大別し，それぞれの領域においてコードを集約しカテゴリを生成した。

結果

表1に示す4グループ9名を対象にインタビューを実施した。9名中6名は大学所属（教授職），3名は研究機関もしくは行政機関の所属であった。

表1 対象者の専門領域と JANS 会員種別

グループ	専門領域	JANS 会員資格
A	看護経済学	会員
A	経営学	非会員
B	老年看護学	会員
B	国際看護学	会員
B	看護政策	会員
C	在宅看護学	会員
C	老年看護学	会員
D	国際保健学	非会員
D	総合診療医学	非会員

A：優先的に取り組むべき看護・保健分野の研究に関する課題

意味内容により断片化した逐語録から，222のコード案が作成された。それらのコード案をさらに統合することにより，最終的に「学際的・越境的な研究」「看護の価値を高める研究」「グローバルな健康課題に対応する研究」「成果研究および Evidence Based Practice を推進する研究」「ヘルスケア提供体制と人材育成に関する研究」の5カテゴリに集約される課題31コードが生成された(表2)。

表2 優先的に取り組むべき看護・保健分野の研究に関する課題

1. 学際的・越境的な研究

病院・地域の連携によるシームレスな医療体制を目指した研究
看護が対象とする現象に関する相関・因果関係のビッグデータに基づく検討
看護ケア提供における情報科学技術（情報通信技術・人工知能）の活用
人文・社会科学と看護学の融合によるケアリングの追求
生命科学(分子生物学，遺伝学)の知見を活用した看護ケアの開発
工学系技術による看護ケアの開発研究
看護の質向上につながる製品開発・ものづくり研究

2. 看護の価値を高める研究

人口減少社会における看護機能の明確化と効果検証
医療の非侵襲化に資する看護技術開発
患者・当事者が研究立案・計画・実施に参加する研究
患者・当事者の経験と価値観に即した看護学のさらなる発展
看護事例の集積による看護実践の根拠の構築
専門分野の異なる多様な看護師からなるチームによる看護提供体制の開発と効果検証

3. グローバルな健康課題に対応する研究

超高齢社会の進展に応じた新たな健康観の構築と普及
超高齢社会の進展に応じた新たな健康指標の開発と普及
超高齢社会・人口減少社会の進展に対応する人材育成に関する研究
ヘルスケア領域の世界的課題の解決を目指した国際共同研究
健康格差を是正するための看護政策研究
日本，海外それぞれの国の文化を考慮した看護実践に関する研究

4. 成果研究および Evidence Based Practice を推進する研究

看護のアウトカムを評価するための大規模コホート研究
看護のエビデンスに関するシステマティックレビュー/メタアナリシス
患者の価値感や経験を反映するアウトカム指標の開発
社会の豊かさを可視化するアウトカム指標の開発
エビデンスを個別患者への看護に統合・適用・実装するための研究
研究成果の社会的な実装や活用を推進する研究
看護学の各領域の研究で共通して使用すべきアウトカム指標（コアアウトカムセット）の特定につながる研究
特定の属性をもつ集団のために介入をデザインした小集団レベルの介入研究
日本の状況(医療制度，医療経済，患者の価値観，文化等)を反映した看護ガイドライン開発

5. ヘルスケア提供体制に関する研究

看護のタスクシフト(役割の拡大・移譲)に応じた新たな看護提供体制の開発と効果検証
医療の持続可能性に寄与する看護提供体制開発
高度実践看護師の育成、活用、効果検証の研究

太字はカテゴリ，細字はコードを示す

B：優先的に整備すべき研究体制

意味内容により断片化した逐語録から、92 のコード案が作成された。それらのコード案をさらに統廃合することにより、最終的に「システム面での基盤整備」「人材育成」の 2 カテゴリに集約される体制 16 コードが生成された(表 3)。

表 3 優先的に整備すべき研究体制

1. システム面での基盤整備

学際的な研究を推進するシステムの構築
看護学の研究者のネットワークの構築
研究部門の設置等の研究体制の改善
国際機関との連携や外国人人材の活用などの国際的な人的交流
看護の国際共同研究を推進する機関の設置
研究成果の海外への発信の促進
他領域とのコミュニケーション基盤の確立
行政や実践現場のニーズを研究テーマに反映させるシステム構築
Evidence Based Policymaking を促進するシステム構築
Evidence Based Practice を促進するシステム構築

2. 人材育成

学際的な研究ができる看護学研究者の育成
看護学研究者育成のシステム構築
大学院教育課程でのイノベーション人材の育成
基礎教育課程でのイノベーション人材の育成
学際的研究、大規模研究のリーダーシップを取ることができる人材の育成
研究能力を備えた看護管理者の育成

太字はカテゴリ，細字はコードを示す

調査 2：JANS 評議員および委員会委員を対象としたデルファイ法による コンセンサス形成

目的

本調査は、調査 1 で挙げられた看護・保健分野の研究に関する課題および整備すべき研究体制について、それぞれの優先順位を設定することを目的に実施した。

方法

コンセンサスメソッドの一つであり、専門家グループがもつ直観的意見や経験的判断を、反復型アンケートを使って組織的に集約・洗練する意見収束法であるデルファイ法を用いた。

対象 本調査では、日本看護科学学会の代議員および委員会委員を、看護学研究の専門家グループと位置づけ、デルファイ法の対象とした。

調査方法 本調査の反復型アンケートは web アンケートシステムを用いて、全 3 段階で実施した。日本看護科学学会代議員および委員会委員 332 名に、調査の目的、方法、対象者に求められる協力内容、倫理的配慮、およびに web アンケート回答用 URL を明記した電子メールを送信した。調査 1 で設定した 47 項目（課題 31 項目、体制 16 項目）について、それぞれの重要度と（とても低い、低い、中程度、高い、とても高い）の 5 段階で尋ねる形式とした(図 1)。第 1 段階では、上記に加え、既存の 47 項目以外に重要と考えられる項目がないかを自由記載でたずねた。自由記載の内容は、委員会委員による討議を経て、第 2、3 段階調査の項目リストに追加した。第 2、3 段階では、前段階の調査結果を集計したグラフを 4 分位点とともに各項目の質問欄に表示した(図 2)。各段階の調査は、2017 年 1 月から 3 月にかけて、4 週間間隔で実施した。第 2、3 段階目の調査は、前段階の調査の協力が得られたもののみに依頼した。

	1 とても低い	2 低い	3 中程度	4 高い	5 とても高い
病院・地域の連携によるシームレスな医療体制を目指した研究	☐	☐	☐	☐	☐
看護が対象とする現象に関する相関・因果関係のビッグデータに基づく検討	☐	☐	☐	☐	☐
看護ケア提供における情報科学技術（情報通信技術・人工知能）の活用	☐	☐	☐	☐	☐
人文・社会科学と看護学の融合によるケアリングの追求	☐	☐	☐	☐	☐

図 1 第一段階回答入力画面例

	1 とても低い	2 低い	3 中程度	4 高い	5 とても高い
病院・地域の連携によるシームレスな医療体制を目指した研究	☐	☐	☐	☐	☐

病院・地域の連携によるシームレスな医療体制を目指した研究

120
100
80
60
40
20
0

0 2 21 46 46

1 2 3 4 5

中央値
Q3 Q1

図 2 第二段階回答入力画面例

分析方法 第3段階の回答分布の4分位点を基準として、各項目の重要度と、対象者の重要度に関する意見の収束度を定めた。重要度は、回答の中央値を基準として、分布が中央値より高い重要度に偏っている場合（第3四分位点は中央値と同値で第1四分位点が高値）には「+」、低い重要度に偏っている場合（第1四分位点は中央値と同値で第3四分位点が高値）は「-」を付し、1, 1+, 2- ～ 4+, 5-, 5の13段階で評価した。収束度は、第1四分位点、中央値、第3四分位点のすべてが同じ値をとる場合に収束度が高い：A、四分位点のどちらかが中央値から外れている場合は収束度が中程度：B、四分位点のすべて異なる値の場合には収束度が低い：Cとした。

結果

第1～3段階に、それぞれ115名(%)、69名(%)、55名(%)の対象者から有効回答を得た。第1段階の自由記載欄から、体制に関する2項目「看護系大学への医療・福祉・介護施設の附置による看護学研究の促進」（システム面での基盤整備カテゴリ）、「看護系大学におけるメンタリング教育の確立」（人材育成カテゴリ）を、第2, 3段階に追加した。その結果、課題31項目（項目ID1～31）、体制18項目（項目ID101～118）について重要度、収束度が設定された。第3段階終了後の49項目について、重要度、収束度の高い順に表4、表5に示した（各段階における回答分布は付録を参照）。

研究に関する課題31項目のうち、重要度が最も高いとコンセンサスが形成されたのは、「看護のエビデンスに関するシステマティックレビュー/メタアナリシス」であった。すべての項目は、重要度3+以上に位置付けられ、収束度はAまたはBであった。

整備すべき研究体制18項目のうち重要度が最も高いとコンセンサスが形成されたのは、「学際的な研究ができる看護学研究者の育成」であった。すべての項目は、重要度4以上に位置付けられ、収束度はAまたはBであった。

表 4 優先的に取り組むべき看護・保健分野の研究に関する課題 31 項目の重要度と収束度

ID	項目名	Q 1	中 央 値	Q 3	重 要 度	収 束 度
21	看護のエビデンスに関するシステマティックレビュー/メタアナリシス	5	5	5	5	A
8	人口減少社会における看護機能の明確化と効果検証	5	5	4	5-	B
20	看護のアウトカムを評価するための大規模コホート研究	5	5	4	5-	B
9	医療の非侵襲化に資する看護技術開発	5	4	4	4+	B
12	看護事例の集積による看護実践の根拠の構築	5	4	4	4+	B
18	健康格差を是正するための看護政策研究	5	4	4	4+	B
22	患者の価値感や経験を反映するアウトカム指標の開発	5	4	4	4+	B
24	エビデンスを個別患者への看護に統合・適用・実装するための研究	5	4	4	4+	B
1	病院・地域の連携によるシームレスな医療体制を目指した研究	4	4	4	4	A
6	工学系技術による看護ケアの開発研究	4	4	4	4	A
7	看護の質向上につながる製品開発・ものづくり研究	4	4	4	4	A
11	患者・当事者の経験と価値観に即した看護学のさらなる発展	4	4	4	4	A
13	専門分野の異なる多様な看護師からなるチームによる看護提供体制の開発と効果検証	4	4	4	4	A
14	超高齢社会の進展に応じた新たな健康観の構築と普及	4	4	4	4	A
15	超高齢社会の進展に応じた新たな健康指標の開発と普及	4	4	4	4	A
16	超高齢社会・人口減少社会の進展に対応する人材育成に関する研究	4	4	4	4	A
25	研究成果の社会的な実装や活用を推進する研究	4	4	4	4	A
29	看護のタスクシフト(役割の拡大・移譲)に応じた新たな看護提供体制の開発と効果検証	4	4	4	4	A
31	高度実践看護師の育成、活用、効果検証の研究	4	4	4	4	A
2	看護が対象とする現象に関する相関・因果関係のビッグデータに基づく検討	4	4	3	4-	B
3	看護ケア提供における情報科学技術(情報通信技術・人工知能)の活用	4	4	3	4-	B
17	ヘルスケア領域の世界的課題の解決を目指した国際共同研究	4	4	3	4-	B
26	看護学の各領域の研究で共通して使用すべきアウトカム指標(コアアウトカムセット)の特定につながる研究	4	4	3	4-	B
28	日本の状況(医療制度, 医療経済, 患者の価値観, 文化等)を反映した看護ガイドライン開発	4	4	3	4-	B
30	医療の持続可能性に寄与する看護提供体制開発	4	4	3	4-	B
4	人文・社会科学と看護学の融合によるケアリングの追求	4	3	3	3+	B
5	生命科学(分子生物学, 遺伝学)の知見を活用した看護ケアの開発	4	3	3	3+	B
10	患者・当事者が研究立案・計画・実施に参加する研究	4	3	3	3+	B
19	日本, 海外それぞれの国の文化を考慮した看護実践に関する研究	4	3	3	3+	B
23	社会の豊かさを可視化するアウトカム指標の開発	4	3	3	3+	B
27	特定の属性をもつ集団のために介入をデザインした小集団レベルの介入研究	4	3	3	3+	B

Q1:第 1 四分位点, Q3:第 3 四分位点

表 5 優先的に整備すべき研究体制 18 項目の重要度と収束度

ID	項目名	Q1	中央値	Q3	重要度	収束度
112	学際的な研究ができる看護学研究者の育成	5	5	5	5	A
106	研究成果の海外への発信の促進	5	5	4	5-	B
113	看護学研究者育成のシステム構築	5	5	4	5-	B
103	研究部門の設置等の研究体制の改善	5	4	4	4+	B
110	Evidence Based Practice を促進するシステム構築	5	4	4	4+	B
114	大学院教育課程でのイノベーション人材の育成	5	4	4	4+	B
116	学際的な研究、大規模研究のリーダーシップを取ることができる人材の育成	5	4	4	4+	B
102	看護学の研究者のネットワークの構築	4	4	4	4	A
104	国際機関との連携や外国人人材の活用などの国際的な人的交流	4	4	4	4	A
107	他領域とのコミュニケーション基盤の確立	4	4	4	4	A
108	行政や実践現場のニーズを研究テーマに反映させるシステム構築	4	4	4	4	A
109	Evidence Based Policymaking を促進するシステム構築	4	4	4	4	A
117	研究能力を備えた看護管理者の育成	4	4	4	4	A
101	学際的な研究を推進するシステムの構築	4	4	3	4-	B
105	看護の国際共同研究を推進する機関の設置	4	4	3	4-	B
111	看護系大学への医療・福祉・介護施設の附置による看護学研究的促進	4	3	3	3+	B
115	基礎教育課程でのイノベーション人材の育成	4	3	3	3+	B
118	看護系大学におけるメンタリング教育の確立	4	3	3	3+	B

Q1:第 1 四分位点, Q3:第 3 四分位点

考察

本事業により、看護学の研究において優先して取り組むべき課題と、そのために整備すべき体制に関するエキスパートオピニオンが集約され、さらにその重要度についてのコンセンサス形成がなされた。優先して取り組むべき課題は、看護の独自性と高める観点と、他領域との融合的・学際的な研究を推進する観点の双方から挙げられていた。また、看護の対象を個人単位（ミクロな視点）で捉えてケアを深めることを重視した課題と、集団単位（マクロな視点）で捉えて普遍的なエビデンスを生み出すことを重視した課題のそれぞれが重要課題として挙がっており、看護学が寄与すべき領域の広さとアプローチ方法の多様性が示された。一方、整備すべき体制については、主としてネットワーク構築（他領域、国際）のためのシステムや人材育成が挙げられ、看護学がその範囲を拡大するための基盤が十分でないことが示唆された。

優先して取り組むべき課題としてその重要度が最も高い（重要度 5、5-）とされた項目には、システムティックレビュー、看護機能明確化と効果検証、大規模コホート研究といった、その重要性が理論的に明確であったり、すでに重要性が広く認知されていたりする項目が挙げられた。それに続いて、看護学研究の基盤となるような普遍的な課題が重要度を高く（4+）定められた。重要度 4 および 4- とされた項目は、上位の項目よりも比較的領域が限定される具体性の高い課題が挙げられた傾向がある。これら

のうち、近年になってその重要性が盛んに謳われるようになった新規性の高い項目（AI、ビッグデータ、コアアウトカムセット等）については、重要度評価の収束度が低い傾向にあった。

課題各項目の内容と重要度との関連を俯瞰するため、前述した看護の独自性/学際性、対象の捉え方としてマイクロ/マクロの2軸でマッピングを試みた（図3）。すると、集団レベルで対象をとらえて看護の独自性を追求する課題は重要度が高く認識される傾向があった。反対に、個人レベルで対象をとらえた学際的研究は、重要度が低く認識される傾向があった。

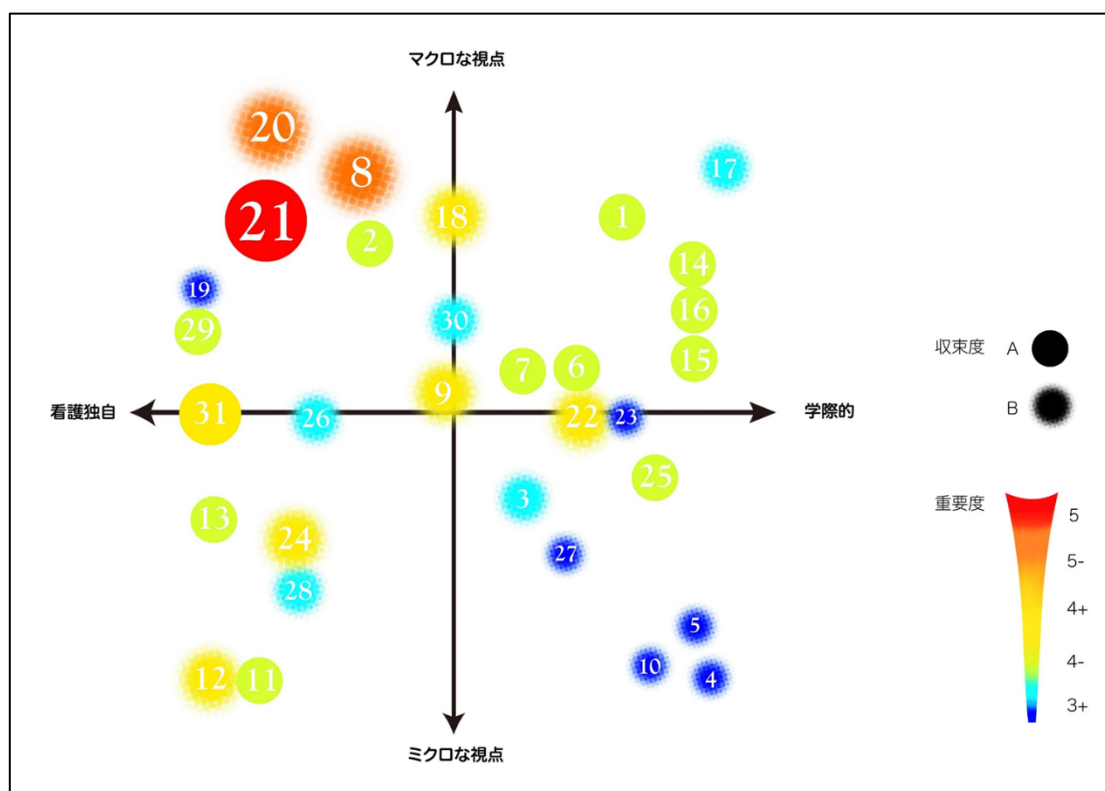


図3 優先すべき課題のマッピング

図中の番号は項目 ID

整備すべき体制については、学際的・国際的な研究推進を目的とした人材育成やネットワーク整備の重要度が高く認識される傾向にあった。ここで、優先すべき課題においては、学際的研究は比較的重要度が低く認識されていたにも関わらず、体制整備は重要視されていることは、学際的研究の体制が、看護独自の研究を推進していく体制と比して脆弱だと認識されていることがうかがえる。